別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　韓　正美

本論文は、『源氏物語』における神祇信仰のさまざまな側面を取り上げ、神の性格と信仰の実態について明らかにするとともに、それが物語の展開や人物造型にどのようにかかわり、意義づけられているかを考察したものである。全体は序と結論で首尾を整え、本論は「第一編　『源氏物語』における住吉信仰」、「第二編　『源氏物語』における賀茂信仰」、「第三編　『源氏物語』における伊勢信仰」、「第四編　『源氏物語』における八幡・春日信仰」の四編からなる。

第一編の住吉信仰の考察では、上代以来の住吉神の伝承と住吉神の性格を展望して整理するほか、平安朝の住吉信仰の実態を明らかにしたうえで物語に立ち戻って、光源氏の須磨退去のいきさつと明石入道一族の宿願・信仰が語られる須磨・明石巻、また住吉詣での描かれる澪標・若菜下巻をていねいに読み解いていく。源氏にとって、明石入道にとってというように、登場人物それぞれにとっての神意の受けとめ方や信心をおさえる読み取りは、総体としての物語の論理をさぐる必須の手順であった。

第二編は賀茂信仰の考察で、ここでも賀茂神の伝承、賀茂祭と賀茂斎院の史的展開、平安朝の賀茂信仰の実態をふまえたうえで、紫上の造型、朝顔斎院の役割、六条御息所と葵上の車争いについて読み解くほか、物語第二部の柏木と女三の宮の密通にまで考察を及ぼし、自らの出生に疑惑を抱く薫の物語にも賀茂神話の投影を指摘する。

第三編では伊勢信仰を扱い、斎宮の属性、前斎宮の入内の事例などから、もっぱら秋好中宮の人物像と役割について、朱雀院の執心にもかかわらず幼い冷泉帝を支え、明石姫君の裳着の腰結役をはたし、源氏四十賀を主催した意味の重さを明らかにする。

第四編の「『源氏物語』における八幡・春日信仰」では、石清水・筥崎八幡宮や春日社・大原野社の縁起や祭りの起源をはじめ、皇族や摂関家の信仰の内実をおさえたうえで、北九州で少女時代を送り、上京して九条に仮住まいし、長谷寺で母夕顔の乳母子右近と再会したことから、実父ではない源氏の六条院に引き取られたことまで、玉鬘の特異な前半生の足取りにさぐりを入れる。そもそも北九州下向以来、玉鬘には八幡神の加護があって、長谷寺門前の椿市での右近との再会には右近の長谷信仰も力があったにしても、これも八幡神の導きと解釈され、六条院夏の町における生活もさすらいにほかならず、実父の内大臣も養父の源氏も親権を発揮できない状況は、父なくして生まれ空舟で流された『大隅正八幡宮本縁伝記』の八幡神そのままである、というのである。

結論として、臣下に下りながら准太上天皇に昇る光源氏の数奇にして類稀な人生は、住吉・賀茂・伊勢・八幡などの神威を担う女性たちを巧みに配することにより導かれたのである、とする。

本論文は各編とも、研究史をしっかりおさえ、神祇書や縁起類をはじめ、平安朝におけ

る信仰の実態を知る歴史史料、文学資料を精査し、『源氏物語』本文を丁寧に読み解いていく手順をふんだうえで、四編にも及ぶ考察を展開した二百五十頁に達しようとする労作である。神祇信仰の側面から物語を読み込むことにより幾多の新見を提示しえており、今までかならずしも見えていなかった物語の脈絡を掘り起こしている点も少なからずあると認められる。

審査委員からは若干の形式的な不備が指摘されたほか、物語の論理という側面からの考察がやや不足しているのではないかとか、住吉信仰では明石入道と、伊勢信仰では六条御息所とというように、主要人物の人物論とからめて論じる必要があったのではないかとか、先行論文の中でもとりわけ民俗学的な解釈についての再検証が弱く、神の性格として認められないものもありはしないかとか厳しい発言もあったが、逆に、追試した結果、最新のテキストにおける誤認を発見している箇所もあるし、『源氏物語』の研究においては最も手薄な分野なので議論の積み重ねが十分でなく、研究者によって積極的に認める者とまったく認めない者がいる状況では、一方の立場に立ったうえでの考察と見なせばよいとする意見もあった。

総じて、従来の研究を数歩先に進めており、不十分と指摘された点の多くは本論文を土台としてさらに追究すべき今後の課題であると判断された。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。